論文審査結果の要旨

本論文について、令和6年8月2日午前10時から12時にわたり、京都府立大学文学部会議室において公開審査会を実施した。最初に概要の発表があり、その後、審査委員による質疑が、各部ごとにおこなわれた。以下に本論文の研究上の達成と、質疑のおもな内容を記す。

研究上の達成

土器、とりわけ土師器に対する緻密な検討が、集落遺跡の動態の理解に大きく役立っていることがうかがえ、土器から集落へという研究戦略は的を射た方法と言える。とくに古墳時代中期の土器は、土師器の系統差についての理解が定まっておらず、時期差か系統差かという基本的なところで意見の一致をみない状況であったが、具体的な出土資料を数多く提示し、資料によってこうした課題を解決しようとした点は大いに評価できる。

集落に対する検討においても、旧地形を復元的に検討するジオ・アーケオロジーの手法を用い、集落立地と平地の開発との関係を地形にもとづいて議論した点も重視できる。そして、津堂城山古墳の周辺にある津堂遺跡に対して詳細な検討をおこなったことは、王権の膝下にある集落の動態を明瞭にしたという点で、決定的に重要であり、その対比資料として提示した太田茶臼山古墳の周辺の集落についても、同様の展開がうかがえたことから、古墳時代中期の開発を普遍的な現象と捉えることに道を開いた。さらに淀川流域の集落についての検討から、水上交通による交易の進展が古墳時代初頭にあり、交易拠点の形成についても中期の開発に先立つ現象として捉えられたことも特筆できる。そして、古墳時代から古代にわたる長期的な俯瞰からも、古墳時代中期が重要な画期とすることができ、地域社会の構造がこの段階の開発によって規定されるとする筆者の考えは、おおいに首肯できる。

ただし、古墳時代前期の事例が大阪平野では稀薄であり、大和盆地の状況などを踏まえる必要がある、あるいは、水上交通についても他地域での連動する状況を示す必要があるなど、大阪府域に限定した立論になっていることに物足りなさが残る。また、王権との関係についても、先験的に王権を論ずるのではなく、古墳時代の諸事象からどのように王権の構造を浮き上がらせるかといった手続きが必要であったと考えられる。こうした課題は残るものの、他の追随を許さぬ緻密さで大阪平野の古墳時代集落を分析したという達成は大いに評価できる。

審査会でのおもな質疑

【序章～第2部】

①布留形、布留式などの用語にブレがあり、器形や器種の用語といった土器の型式学の運用は大丈夫か？

②遺跡の土器を扱う際に、遺跡の性格、あるいは遺構の性格などを配慮しなくてよいのか？

③前期からの流れで中期の土器を編年するという趣旨であるが、前期の土器についても再検討を進める必要はないのか？

【第3部～第4部】

④中期からの地域開発を扱っているが、前期に開発された地域についての言及がない点が不審である。前期の開発地が中期にどのようになっているのか？
⑤王権の膝下としているが、具体的に王権の関与とはどのようなものか？具体的に示す証拠は何か？
⑥大規模な古墳の造営と集落との関係については明確でないが、そのリンクを明らかにする必要があるのではないか？
⑦今回示したエリアは一つのモデルになると考えられるが、それ以外のモデルは存在しないのか？複数のモデルを示しながら王権の関与するモデルとしてまとめた方がよいのでは？
【第5部～終章】
⑧開発についてはその主体が何なのか？
⑨地域構造を知るためには、流通にも目を向けるべきでは？
⑩集団の統合を目的に掲げているが、何をもってその目的を達成しているか？

以上の質疑に対して、以下のような応答があった。①用語については、さらに検討していく。②祭祀土坑を取り上げたのは、そういう意図であったが、より具体的に検討していきたい。③前期については資料の提示が不十分であったので、改めて追加していく。④前期の開発地がその後にどうなっていくのかという点が描けていなかった。改めて考えてみたい。⑤先験的に王権を用いており、津堂については場所から確実と言えるが、太田茶臼山の周辺については、より丁寧な検討が必要である。⑥百舌鳥古墳群の周辺の集落遺跡なども検討する必要があると考えている。⑦大阪平野の事例でモデルになることは確実と考えるが、それとは異なるモデルの提示は考えていなかった。各地をみていく上で考えてみたい。⑧今回は文献に登場する氏族などの検討をまったくおこなっていない。こうした検討も将来的には進めていきたい。⑨水上交通などでのつながりについて、さらに地域を広げて見ていく必要を感じている。⑩集団の統合については、本論文のテーマに掲げたときから大きな課題と考えている。地域の開発にあたって、いろいろな集団が入ってくる事象をもって集団の統合と考えることができるのではないだろうか。この点についてはより深く検討していく必要がある。

以上の質疑応答からもわかるように、今後の検討すべき課題が多く残されていることも浮かび上がっている。しかしながら、こうした課題が浮かび上がるのも先に触れた本論文の達成の大きさによると考えられ、基礎的な資料の検討作業に十分に取り組み、詳細な資料提示のうえで、古墳時代の開発を浮かび上がらせ、その画期性とともに、王権の形成にとって果たした役割などを、考古学から明らかにするという本論文のもくろみは十分に達成されているものと判断された。これは、単に大阪平野を舞台にした限られた地域の歴史ではなく、日本列島史への波及も期待できる大きな成果であると評価できる。以上から、本委員会は、本論文が博士（歴史学）の学位授与の評価基準を満たしていると判断し、博士（歴史学）の学位を授与するに値するものと認める。